

ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤 優 （聞き手・小峯隆生）

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身に着けるべく、今月も、ともに学んでいこう。

第四回

虹は七色ですか？

佐藤 われわれ日本人は「虹の色は何色？」と問われれば、七色と答えます。おそらく小

学生でもそう答えるでしょう。誰も「三色」だったり、「十色」だったりとは言いません。

でも世界には、三色です、十色です、という人々も大勢います。「七色の虹」といつて通じるのは、日本の文化圏の中だけなのです。つまり日本人の間には、「虹は七色」との共通認識があり、それがいわば常識となっているわけです。

こうしたことについて、廣松渉さんの『新哲学入門』では、共同主観性（間主観性）という言葉をよく使って説明しています。自分と他人の間に共通の認識があるから、物事や世界が成り立っているという考え方です。

——なるほど。するともしかして、虹が見えたらなんとなくラッキーと思ってしまうのは、日本人だけなんですか。

佐藤 それも、日本の文化の中での話です。中国では、子どもは親から「虹を見ると目がつぶれる」と言われることがあります。

それに中国の政治家は、虹を好みません。古来、虹は、地上の秩序に怒っている天の不満の表明だと伝えられてきたからです。大飢饉^{だい き きん}、天変地異、政変の象徴のように言われることもあります。

——なんだか、日本と真逆ですね。でも、ハリウッド映画などでは、ラストシーンとかで、希望の虹が彼方に……なんてシーンたくさんありますよ。欧米は虹に対する感覚が日本に

近いのでしょうか？

佐藤 ハリウッド映画などで、虹が希望の象徴のように描かれるのは、ユダヤ・キリスト教の影響が大きいと思います。旧約聖書に出てくるノアの方舟^{はこぶね}の物語ですね。

大洪水がおさまった世界で、祭壇^{さいだん}を築き、捧げ物をしたノアたちに対し、神はもう大洪水を起こさない証として空に虹をかけるのです。

今の日本人が虹に良いイメージを抱いているのも、近代以降に欧米化が進んだことが大きいでしょうね。

われわれは、三角の島に住んでいる!?

佐藤 廣松さんの哲学のキーワードに、「物象化」があります。

人間は、その社会的環境において他者との関係を有します。その関係がモノのように見えてしまう現象を「物象化」と、廣松さんはいっているのです。マルクスの考え方からさらに発展させた考え方です。

マルクスは、近代以降、人間は自らが作り出した社会システムに取り込まれ、いつの間

にか、主導権を持たない歯車になってしまっている、という考え方を示し、それを「疎外」と呼びました。そして、人間性を取り戻さなくてはならないと主張もしました。その主張・考え方を「疎外論」と言います。もっとも「疎外」という元には、取り戻されるべき「本来の姿」があるという前提があります。

廣松さんは、この「本来の姿」なんていうものはなく、関係性こそが常識だったり、社会のシステムだったりをつくりだしている、と考えたのです。

お米で考えてみましょうか。

AさんとBさんがお米を生産しているとします。同じ時間をかけて、同じだけの収穫を得て販売しました。しかし、Aさんの生産したお米は、コシヒカリ。Bさんのお米は一般のごくごく普通のお米でした。結果、Aさんのお米の方が高く売れ、多くの収入を得ました。

いわば、Aさんのお米は「ブランド米」だからこそ売れたわけです。生産者と消費者、消費者と消費者の関係性から生まれたものです。「ブランド米」というのも「物象化」のひとつの現われなんですね。

さて、この「物象化」ですが、じつは仏教の考え方に似ています。

ユダヤ・キリスト教では、「世界」はどうやってできたとなっていますか？

——光あれ、ですよ。

佐藤 そう。では、仏教は？ となると……。答えをいってしまいますが、「唯識」と、「阿

毘達磨倶舍論」で展開されるアビダルマ哲学が重要になります。

「唯識」は、大まかにいえば「世界は心にあり、外界はない」という考え方です。

一方、アビダルマ哲学では、「世界はすべて関係性によって成り立っている」と考えます。

アビダルマ哲学は、上座部（いわゆる小乗仏教）の考え方ですが、大乘仏教の経典にもアビダルマ哲学をふまえたものが少なからずあります。たとえば、法華経に出てくる宇宙観です。

虚空の中に風が吹いてくる。やがて、風はグルグルと回っているうちに、上部に水の層（水輪）ができる。その層が厚くなってくると、牛乳を沸かした時にできる膜のようなものができる。しかも、それは金属の膜。

その膜を金輪と呼びます。その水輪と金輪の境目を金輪際といいます。「お前とは金輪際付き合わない」なんて言うときの「金輪」の語源です。

その金輪から、山が出てくる。その山の名が、須弥山（シュミセン）。ここはスメール世界とも呼ばれます。

やがて、その須弥山を中心に、四つの島ができあがる。四角い島、丸い島、三日月の島、三角の島の四つです。

我々は、その三角の島に住んでいるというのが、阿毘達磨俱舍論の創世の考え方です。空は、なぜ青いのかも、きちんと解説されています。

——地球には大気があるから、太陽光の青い光をその空気が散乱させて……。

佐藤 スメール世界は少し違います。須弥山の側面にエメラルドの青い壁が嵌めこまれている、だから、空は青い。別の島に行くと、空の色は違います。

須弥山の上の方には天上界、我々の住む三角の島のある地上の少し下がった所には、畜生道、さらにその下には餓鬼道、その下には地獄があります。

これがアビダルマ哲学の宇宙観ですけど、実体としてあるわけではなく、すべて関係性（物象化）からできています。

さらに関心があるのならば、『存在の分析「アビダルマ」—仏教の思想2—』（角川ソフィア文庫）があります。大谷大学名誉教授・櫻部建先生と京都学派の哲学者・上山春平氏が書いた本です。興味があれば、そちらも参照してみてください。

人間は文化的拘束の結果を体現する

佐藤 さて、関係性から生まれることを物象化と言いましたが、この物象化は文化的に拘束されている面もあります。

ここで、質問です。

インドに、ボランティアとして汲み取り式公衆トイレを作りに行ったとします。どうなると思いますか？

——そりゃー、現地の皆さんは、衛生的になると、喜んで、使うに決まっています。

佐藤 いいえ、誰も使いません。何の役にも立たないでしょう。

彼らの排泄物にもカースト制があるからです。先の廣松さんは「摂食のしかたや排泄のしかたでさえ本能のままではなく、文化的拘束」をされていると指摘しています。

——排泄物にも偉いのと、偉くないのがあるのですか？

佐藤 あります。

カーストの違う人々の排泄物が混ざるのはタブーなのです。

インド人は、朝起きて排泄をしようとする際、カーストが違う他人の排泄物が自分のものと混ざることが嫌がります。

だから、公衆トイレを作っても使用する人がおらず、何の役にも立たないとお話したのです。

近代になる前まで、排泄物は、ある意味「宇宙」を反映していました。それは、身体から出てくる残余でありながら、全部人格があります。だから、その話をインド人とする、

本当に蘊蓄のある話ができたりもします(笑)。

人間は生まれたときは、精神も知能も未成熟で、その後の教育の成果で、一人前の大人になります。この教育によっても文化的な拘束は生まれます。

また、歴史的背景も見逃すことはできません。戦前の日本では、こんなこともありました。

和式便所は足腰のバネを強くするから、洋式便所を使うなといった動きがあったのです。

早稲田大学出身で、^{なかやまただなお}中山忠直という論壇人がいましたが、この人が書いた『日本人の偉さの研究』の中に、トイレの話が出てきます。

日本人は米の飯を食って、粘りっこい排泄物を出す、よって日本人は粘り強いのだと。

とくに重要なのは便所で、洋式の腰かけるスタイルではなく、跨ぐ便所だから足腰のバネが強くなり、喧嘩も強くなって、白人に打ち勝つ、と、こんな論を主張したのです。

大正デモクラシー直後は、周囲から「馬鹿じゃねーの」と軽蔑されていましたが、昭和13年になって、一躍注目されました。

——なんで、また、急に？

佐藤 昭和13年の戦時体制下で、この本の第二版が出版されたことも影響していると思います。

「一昔前は皆から馬鹿にされてきたが、今は周囲も、私と同じような主張をするようにな

った。日本はだいぶ、良くなった」と書いています。

太平洋戦争に向かう流れのなかで、「素晴らしい、これこそ、日本思想である」となったようです。

また、昭和3年のアムステルダム・オリンピックで、三段跳びで金メダルを獲った織田^{おだ}幹雄^{みきお}氏も、きっと子供の時から和式便所で踏ん張ることを繰り返した結果、足腰のバネが強くなったのだと、大真面目に当時の人々の間で語られていました。

いま、こんなお話をして、多くの共感は得られないでしょう。これなどは、歴史的背景による拘束の典型的な例ですね。

<つづく>

今月の内容をより深く学ぶための本

『新哲学入門』

廣松渉著 岩波書店（岩波新書）

『存在の分析「アビダルマ」—仏教の思想2—』

櫻部建著／上山春平著（角川ソフィア文庫）